

ドSな彼によしよしセックスをリクエストしたら、思ってたのと違う展開になりました

体験版

受け：真壁

攻め：菅原

要素：強気受け、恋人同士、よしよしセックス、前立腺責め、耳責め、乳首責め、連続絶頂、攻めフェラ、寸止め、結腸責め等

外回りの合間、立ち寄ったカフェの中。仕事半分、休憩半分の時間を過ごしながらプライベート用の携帯を見ると、ちゃんと昼飯を食ったか、という母親のようなメッセージが届いていた。ちなみに昼食はまだ取っていないので、恋人である菅原さんの指摘、および心配は的を得ている。

ただし彼は、普段ならこのくらいのことは直接言ってくる。それがなぜ、あえてメッセージアプリを介したものになっているのか。答えは単純で、彼は昨日から明日にかけて、二泊三日の出張だからだ。

内容としては、木曜日に現地に到着し、金曜日の今日、支社に訪問しつつお得意先に挨拶に行くはずだ。そして夜は夜遊び大好きなお得意先の社長さんと、朝帰りが確実な接待飲み会を盛大に堪能して、土曜日のどこかで戻ってくるスケジュール。

社歴が長くて気が利き、ノリもよく、酒にもそれなりに強い菅原さんは、こういう機会に上司から盛り上げ役として引っ張っていかれる事が多い。対する僕は、一度も声がかかったことはない。適材適所とはいえ、僕が菅原さんに敵わないところの一つではある。

現在時刻は15時。ランチには遅い時間だとしても、遠方の恋人は忙しい時間を縫って、体調を気遣ってくれている。仕方がないのでサンドイッチの一つでも食べるかと腰を上げて、追加注文のためにレジに向かった。

会社に戻ると、金曜日の夕方なだけはある、忙しく仕事に追われる人と、今後の予定に浮かれる人に別れていた。本来なら僕も菅原さんとの週末に心を躍らせているところだけど、今日は違う。しかもこんな日に限って急ぎの仕事もない。暇なのに菅原さんがいないのが寂しい。

「あの～...、真壁さん」

「何？」

「一応聞いとくんですけど、今日の飲み会来ます？」

だから、気持ちとしてはちょっとセンチメンタルだった。一人で過ごす週末があまりにも久しぶりだったから、誰とでもいいから一緒にいたい気分だったんだ。

そうじゃなければ、こんな藪から棒の誘いなんて、絶対に断っていたのに。口が
うっかり、参加を表明していた。

「...行く」

「そうですね、やっぱ無理.....、って来れんすか！？マジ！？えっ！？のっ、
飲み会に真壁さんが来る...！！？」

「真壁さんが...！？」

けれども僕が短く参加意思を示すと、周辺にいた人が一斉に僕を見た。声をかけ
てきた後輩が、珍しい僕の返事に驚くのはまだ分かる。なのになんで周りの皆ま
でもがざわついたんだと、今度は僕が周囲の反応に驚いてしまった。

やっぱり、行かないほうが無難だったのだろうか。別に絶対に行きたいものでも
ないから、嫌がられるなら不参加でいいかと、僕は慌てて自分の言葉を取り消そ
うとした。

「な、なに...？いや、僕が行かないほうがいいなら全然...」

「いやいやいやいや来てほしいっすガチで！ちょ、連絡回すんで！おいお前ら！
今日は真壁さんが来るぞ！一回断った奴らにもまた声かけろ！」

「若干洒落てる店で当日行けるとこ急いで探せ！」

「16時退社の契約社員の子達は！？」

「まだ間に合います！」

でも後輩の勢いに飲まれて、結局参加を取り消すことはできなかった。それから鬼の形相でメッセージを送る人、電話をかける先輩、早足で部署を回って声をかける人など、様々な形で飲み会の連絡なるものが回っていく。

これは、なんだか嫌な予感だ。いや、そもそもこういうのが嫌で、僕は飲み会に行かなくなった気がする。しかも今日は、ガード役の菅原さんもいない。まずい、これはやったかもしれないと思いながら仕事終わりに飲み会会場に足を運ぶと、15人程度の人が既に集まっていた。その過半数が女性だったのを確認して、そっと冷や汗を流す。

「真壁さん。今日はおかげさまでかなり女子率上がりました」

「僕を客寄せパンダにしないでもらえる？」

「まあまあまあ、選り取り見取りってことで！さ、真ん中座ってください、真ん中！」

後ろから背中を押されて席の真ん中に座ると、さっそく女性陣から取り囲まれてしまった。残念ながら僕は生粋のゲイなので彼女たちに可能性はないのだけれど、はたから見ると僕が優良物件なのは理解している。なのでとっかえひっかえ質問攻めにあい、両サイドを常に女性から挟まれ続け、菅原さんがいないところで浮っているみたいになってしまった。そんなつもりではなかったのにと反省しながら飲む酒は、菅原さんと2人で家飲みする時よりも美味しくない。

そして時間が進んで、ちらほら先に帰る人も出てきたころ。僕を飲み会に誘った後輩が、すっかり出来上がった状態で僕の隣にやってきた。

「真壁ひゃん！飲んれますか！」

「君ほどではないけどいただいてるよ」

「俺、ずっと気になってたんでふけど、真壁ひゃんって彼女いないんれす
かあ？」

「いないよ」

「こんなにモテんのに！？絶対うそ！」

完全に絡み酒の後輩にため息を付くしかないが、酔っ払い相手だからと嘘を付いているわけではない。実際、彼女はいない。けれども妙なところで鋭い後輩は、ここに来てピンポイントに彼の名前を出してきた。

「でも～、怪しいのは真壁ひゃんだけじゃないです。菅原さんもほんろは怪しい
んでふ」

「ふうん？なんでそう思うの？」

「昔はもっと夜遅くまで飲んでたのに、最近はどうだか捕まえても2次会で帰る
んすよぉ～。休みの日も独身勢で結構遊んでたのに…。あれは女います！女に管
理されてる！」

わぁっ、と両手を顔に当てて嘆く後輩を見ながら、僕は付き合う前の菅原さんを
思い浮かべて、そういえばそうだったかもしれないな、なんて思っていた。でも
今だって、ガチガチに束縛することを言った覚えはない。飲み会に行くことも、
会社の誰かと遊びに行くことも、やろうと思えばできるはず。そう思うと、菅原

さんは相変わらず方々から誘いを受けながらも、ほとんど断って僕との予定を優先してくれているらしい。

なるほど、だとすると僕って結構愛されてるのかもと、彼のいない場所で小さく胸をくすぐられた。

「菅原しゃん、彼女出来たら大事にしそうっすもんね」

「そうだろうね」

「真壁ひゃんは？」

「大事にするよ？」

「さらっとかっこいい～！いやっ、でも俺は！恋人にするならイケメンでシゴ德基な真壁ひゃんより菅原しゃん派です！」

「は？何で？」

ただ、後輩から聞き捨てならない言葉が飛び出してきて、ぱっと彼の方を見てしまった。おかしい、菅原さんには悪いけれど、ほぼ全ての分野において僕の方がモテる要素を持っているはずなのに。なんで僕と菅原さんを比べて彼に軍配が上がるんだと、ついムキになってしまった。

「だってえ、菅原しゃんは喧嘩しても怒らなそうだし、甘えさしてくれそうだし」

「まあ、そう...、かもだけど」

「あとは～、夜もめっちゃよしよししてくれそうじゃないっすかぁ～」

「よしよし？」

「知らないんすかぁ？よしよしせっくふのことお。真壁しゃんもまだまだ夜のことは——」

「っ、バカお前！真壁さんに下ネタふっかけんな！」

けれども若干気になるワードが出てきたところで、近くにいた何人かが泥酔した後輩をひっぱたいた。そのまま僕の隣を占拠していた彼が、ずるずると壁際に回収されていく。

「なんれ！？俺真壁ひゃんとしゃべったのに！」

「真壁さんとの会話内容に品を持て！」

「周りの目え見ろ！お前来週殺されるぞ！」

「社内の女からフルシカトされちまう！」

突然の出来事に、僕はぽかんと口を半開きにして固まってしまった。そして彼が口にしたことが何事か分からないまま、また周りを女性に囲まれていく。

菅原さんは確かに、僕の我儘を許してくれる寛容さもあるし、基本的には優しい。そこは合っている。でももう一つの、夜のよしよしに気になる。呂律が回っていなかったけれど、彼は今「よしよしセックス」と言いかけていた。流石にその場で調べるには気が引ける内容だったので、僕はあくる日、自宅でよしよしセックスなるものを調べた。

「よしよしセックス...、よしよしセックス...。う～ん、なんかいまいち分かんないなあ」

気になる事は徹底的に調べるタイプの僕としては、たとえ下世話な話だったとしても知識として入れておきたい。だから調べてはみたけれど、俗称なのか完璧な回答は出てこなかった。

パソコンで検索してみたものをざっくりまとめると、どうやらパートナーを思い切り甘やかすセックスのことを、分かりやすく表している言葉らしい。なので後輩の口ぶりの、菅原さんの人柄から考えて、夜も優しいセックスをしてくれるのだろうと思っているようだ。

ただしイメージを壊すようで悪いが、それは大きな勘違いだ。菅原さんは、夜に関しては全然優しくない。むしろ喜んで僕をいじめてくるタイプだ。普段はともかく、ことセックスに関しては彼の普段の印象とはほど遠い。それがギャップで良いという話でもあるのだが。

「...暇だなあ」

けれど、後輩の言葉の真相が分かったところで何も変わらない。一人の週末は、くだらないことを調べるほどに時間を持て余している。社内評価に関わる資格の勉強でもしようかと思っていたけれど、集中力も散漫だ。だったら映画でも見るかと思ってかけてみても、なんだか味気ない。だからいつの間にか、テーブルに突っ伏して寝落ちていた。

それから、どれくらい寝ていたんだろう。固い机に寄りかかったせいで痛む体を少し伸ばすと、お、と横から声が聞こえてきた。はっとして斜め上を見てみると、そこには待ち望んだ恋人の姿がある。

「お、起きた。珍しいな、真壁が昼寝してんの」

「...え？」

休日の自宅に菅原さんがいるのは、とりたてて珍しいことじゃない。むしろそれは日常の一部になっている。ただ、出張帰りの彼がいることは、寝起きの僕にとっては想定外だった。けれど体は反射で、彼にいつもの挨拶をする。

「...？おかえりなさい」

「うん、ただいま」

ぽんぽん、と頭を撫でてくれる手の心地よさに、覚醒が追いつかない脳がふにやりととろける。気持ちいい、そうだ、僕はこの手を待っていたんだと、もう一度目を閉じかけてしまった。うっかり何度も昼寝をしてしまいそうなくらい、彼が隣にいと安心する。だけれどせっかく菅原さんがいるなら起きなくてはと、瞼を手の甲で擦った。

一瞬夢かとも思ったけれど、これはちゃんと現実だ。どうやら僕がうたた寝をしている間、菅原さんが僕の家に来てきたらしい。合鍵を渡しているし、お互いの家には連絡一本入れれば家主が不在でも入る間柄だから、それは別に珍しいことじゃない。

「お土産、キッチンのとこ置いてる」

「ありがとうございます——...！！」

ただし、出張帰りの菅原さんがやってくることは、僕にとって予定していなかったことだ。だからあくびをした後の視界に、明るい画面のPCが飛び込んできて息が止まった。

バン、と大きな音を立てて、ノートパソコンを思い切り閉じる。しまった。コンセントからの給電中は、画面が暗くならない設定にしていたのがあだになった。咄嗟に閉じたけれど、僕の目が狂っていないなら、おそらく画面には寝る直前までに調べていた「よしよしセックス」に関する内容が映っていたはず。

いや、でも、たとえ画面に表示されていたとしてもだ。菅原さんが見ていない可能性もある。僕はそれに賭けたい。だけれど心配だから、一応確認だけはしておこう。

「...見ました？」

「見た」

しかしながら、彼は僕の願いを裏切り、がっつり見てしまったらしい。

でもまあ、そうだろうとは思った。当然彼も気にはなるだろう。だって恋人が、自分のいない間にセックスに関する話を検索していたと知ったなら、僕だって見る。なんなら、寝ているのをいいことに若干パソコンも操作すると思う。へえ、この人こんなの調べてるんだ、という秘密をくまなく見てしまうと思う。

衝撃の失態に、寝起きの頭は耐えられなかった。とにかく言い訳だ。なぜこうなったかの経緯を話すべきだと、信じられない速度で口がまわる。それにしても顔が熱い。斜め上からの視線が痛い。

「っ、こ、これは僕が率先して調べたわけではないですから！昨日、たまたまそういうワードが出てきたから調べただけでっ！知らないことはどんなことでも調べないと気になるので！」

「うんうん、分かるよ」

「べっ、別にその！菅原さんとよしよしセックスがしたいとか！そういうわけではなくて！」

「でも気になるんだろ？」

「え？」

「よしよしセックスがどんなもんかって」

けれど、菅原さんからバカにされるかと思いきや、彼は逆に質問をしてきた。なぜ調べていたのかを追及されるなら分かるけれど、よしよしセックスがどんなものか気になるのかと聞かれるとは思わなかった。

気になるか、気にならないかの二択で問われると、気にはなる。あとは、いつも僕をいじめてくる菅原さんが、相手をベタベタに甘やかすセックスなんかできるのか、という疑問もある。そして可能なのであれば、甘やかされてみたい願望もあったりする。

「気にならない、とは、言い切れないです」

「そこは気になるでいいだろ」

「でっ、でも、菅原さんにできるんですか？僕を甘やかすなんて」

「それを含めて試してみたらいいじゃん」

だから、うまいこと誘導されて、床に座る僕の前にしゃがんできた菅原さんにキスをされたら、もう引き下がれなかった。すりすりとお腰のあたりを撫でられたら、欲張りな身体には簡単にスイッチが入る。

「...確かめるために、してもいいですけど。イマイチだったらやめますよ」

「善処しますよ、かわいい恋人の頼みですから？」

ふふん、と勝ち誇ったように笑う菅原さんに、してやられたような気がしないでもない。しかも土曜とはいえ、まだ明るいうちからベッドに行くなんてたかれた休日だとも思う。でも、自分ひとりで映画を見るだけの一日よりは、彼とベッドの上で過ごす方がよっぽど充実していると思うくらいに、菅原さんという時間は僕にとってなければならぬものになっているらしい。

ただし、よしよしセックスを実行するのはいいにしても。促されるままに寝室に足を運んだら、なぜか急に気恥ずかしくなってきた。出張帰りの恋人と、出会い頭に即セックスって大人としてどうなんだと、ここにきて冷静な自分が顔を出す。それを感じ取った菅原さんが、僕の服を脱がせながら困った顔で笑っていた。

「なんでそんな難しい顔してんの？」

「や、なんか、普通は出張どうでしたとか、そういう会話の切り口があったはずだと思って」

「あんな卑猥なパソコン画面見せられたら無理だろ」

「見せてたわけではないです！」

「俺はアピールなのかと思って固まったけどな」

はは、と笑いながらTシャツを脱ぐ彼の方を見れない。画面を放置して寝たのは単純に僕のミスで、無言のアピールをしたつもりは全くなかった。結果的にそうなってしまったけれど、してほしいと思っていたわけではないのに。やりたがりの奴みたいになってしまって心底恥ずかしい。

「誘ってたわけじゃないのに…」

「俺は真壁が積極的なのは嬉しいよ？」

「うう…」

でも言い訳するほどにドツボにはまっていく感じがして、普段のように強く出れない。そっと身体を倒されて、首や鎖骨にキスを落とされるだけでも、ぎゅっと身体が硬直してしまう。こんなこと、毎回毎回やってるんだから今更恥ずかしがるなよと思うのに、なんだか今日はいつもと違う。

あとは、そもそもやる前提でこの時間が始まったわけじゃないから、入れるにしてもほぐしてもらわないといけない。それくらいは事前に伝えておくかと、僕のお腹に顔を埋める菅原さんの耳を軽くつつく。

「菅原さん」

「なに？」

「今日、僕まだ準備してなくて…」

「ん、わかった。ローションどこだっけ？」

詳しく言わなくても、菅原さんに僕の意図は伝わったらしい。だから僕も少し起き上がって、ベッドの下のそれ用の引き出しを開けて、彼にローションを渡す。この行為そのものが、あなたのモノを入れるために、僕の中をほぐしてくださいと言っているのと同じなので、それも羞恥を加速させた。だから、ローションボトルから出した液体を手に乗せる菅原さんを見た時に、我慢の限界が来た。なんだか今日は、ずっと菅原さんを見ていることすらできないかもしれない。

「あ、あの」

「なに？」

「さっき変な体勢で寝てたから、ちょっと腰がしんどくて。今日、後ろからほぐしてもらう感じでも大丈夫ですか」

「あ、そうなの？いいよ。じゃあ後ろ向いて」

正面で向かい合っていていたら、多分途中で心臓が爆発する。今でさえ鼓動が落ち着かないのに、これでは話にならないと思った僕は、適当なでまかせを言って後ろ向きになった。ほぐすのは僕が四つん這いになってもできるだろうし、本当はこの体勢もちょっと苦しいのだけれど、枕を抱えていれば声も誤魔化せる。なかなかいい逃げ方だったなと、自分を少し褒めたい。

「指入れるぞ」

「は、いい...ッ！」

ぬぶ、と滑りを纏った指が中に入ってきた。でも、何を興奮しているんだか分からないけれど、僕の中ときたら、菅原さんの指を大歓迎しているじゃないか。きゅううう、と締め付けて、離さないぞと吸い付いている。いやいや、欲しがり過ぎだ。寂しかったことを身体で示さなくてもいいのにと、恥ずかしさを枕で隠す。

「痛くない？」

「っ、大丈夫、ですっ」

「じゃあゆっくりしてくから」

「ん、っ、んん...！」

一応後輩くんのイメージを尊重するなら、菅原さんはSの化身ではあるものの、僕を肉体的に傷つけることはなるべく避けてくれる。その点において、彼は確かに優しいのだと思う。付き合う前も後も、自分が入れたいがためにほぐすことなく無理矢理入れるとか、爪を切っていない指でグリグリ中をいじくるとか、そういったことは一切ない。じゃあ尿道にブジーを入れたり、玩具で嫌って程イカせてくるのが優しいのかと問われると、どうなんだろうとは思うけど。

「は、あ、っ、ん、んっ、んんう...！」

「今日の真壁の中、いつもより熱いかも」

「ッ、ふぁ、ぁぁっ！」

でも少なくとも、今日はその全てをひっくるめても優しい方に入と思う。ぬりぬりと奥に進む指が、的確に前立腺を捉えては来るけれど、イカせようと思って強引に引っかけたりはしない。すり、すり、と指の先で擦られては、ゆっくり押されて、また指が抜けていく。そこで中が寂しくなったら、また滑りを足した指が入ってきて、中を広げながらいい場所も押してくれる。

「ん、ぁっ、ぁ、ぁ、んん、ンンン...！」

「気持ちいい？」

「っ、っ！」

ふにふにとしこりを押されながら聞かれると、声も出ないくらい感じていた。まだ準備段階なのに、これほど感じているのが恥ずかしい。嘘をつくほどの余裕もなく、こくこくと枕に額を擦りながら頷いた。そしたらなぜか、菅原さんが僕の背中にピタッと張り付いて、空いている手をお腹の方に回してきた。すりすりとおへその上を手のひらで撫でられると、じわっと皮膚の下が熱くなる。

「今日は声出さない日？」

「や、別に、そういうわけじゃ」

「我慢してる感じもかわいいよ？」

「っは、う...！？」

背中側からすっぽり包まれている感覚は、菅原さんの体温を感じるから安心材料にもなる。だけれど、お腹の手のひらが僕の熱の近くに移動して、既に勃起している熱とお腹の間を擦られると、きゅんと下腹が疼いてしまった。がく、と肘が崩れて、お尻だけが高く上がる。

「あ、あ、何かそこ、やだぁ...！」

「なんで嫌？」

「わ、か、んな、い、です、けど...っ！」

「どこでも感じてエロいな」

「んんんううう...っっ！！」

ただにお腹側に気を取られていたら、中の指がそっと2本に増やされた。そのまま前立腺を挟んだ指が上下に動くと、挟まれたまま揉まれてかなり気持ちいい。しかもこれも、快感で殺しにくるみたいないつもの指使いと違って優しい。すりすりと揉みこまれると、ずっとしていてほしいような、もっと強くてもいいような、その間の感じだ。

「んは、あ、あ、っ、ん、あああ...！」

「かわいいな、真壁」

「っ、う、あ、ひ、ッ、あ、あ、ううう～～...っ！」

お腹をさすっていた手が、僕の手をそっと握る。それから耳元にやってきた菅原さんの口が、はむりと僕の耳をかじった。そのまま軽く吸って、ぬとりと中を舌で舐められると、背中がゾクゾクしてたまらなくなる。思わず枕を握りしめながら、中をぎゅっと締め付けてしまった。

「あううう...！ん、耳、やあ...！」

「ここも好きだろ？」

「や、だ、感じちゃう、からっ」

「いっぱい感じていいのに。真壁の声聞かせて？」

「あ、あっ、ん、ッンン！ひう、だめ、こんな、あ、あ、う、はっ、はあ、ツッ！！」

菅原さんの愛撫の中では、今日はかなりぬるい方だと思う。前戯でも容赦なくイカせてくるときはこの段階でもめちゃくちゃにイカせてくるし、そうかと思ったら寸止めしたり、自分がイクまでイカせてくれない時もある。だからそれらと比較したら、責め方に優しさを感じるくらいだ。僕をいじめるのではなく、甘やかすためにセックスをしている、という表現が合う。

中でも、特に念入りに甘やかされているのは前立腺だと思う。くちくちといやらしい音を立てながら、執拗なくらいに揉みこまれている。しかも彼の指にイカせてやろうという意地悪さは全くないから、ただ僕が気持ちいいだけだ。僕が一人で高まって、お腹をヒクつかせて、菅原さんのぬる過ぎる指使いでもイキそうになっている。

「ひっ、う、あ、あ、や、だ、も、やだぁ...！」

「なんで逃げようとしてんの？」

「だ、って、い、イキそ、で、ぼく...っ！」

「中イキしそう？もうイク？」

「は、う、うっ、嫌、こんな、まだ、早いい...！」

「大丈夫だって。気持ちいいならイっていい」

「〜〜っ！！」

おそらく菅原さんにも、僕をさっさとイカせようなんて気持ちはさらさらない。だから僕が絶頂に向かっているのは、この身体が快感に流れているなによりの証拠だった。恥ずかしい、菅原さんから強引にイカされる方が、僕のせいじゃないと思えてまだいい。今日に関しては、このぐらいの前戯で勝手にイってしまう僕が淫乱なだけじゃないか。違うのに、欲しがっているわけじゃないのにと、首を振った。嫌がる膝が前に進む。彼の指から逃げようと抗う。

でもそれを、僕の手を握る菅原さんが阻止する。きゅっと強めに手に力を入れてから、わざと菅原さんが僕に体重をかけた。ずっしりと上からの重みで動けなくなった僕は、ゆったりとしたペースで前立腺を揉まれる。びく、びく、とイキそうに震える場所を、くにくに、すりすり2本の指でひたすらに甘やかされた。

「ふああ、あ、あ、だめ、そこだめ、うう、ッ、は、あ、も、いや、やあああっ！」

「前立腺、すりすりされんの気持ちいいな？」

「んっ、あ、よ、すぎ、て、だめ、ダメに、なるっ...！ふっ、う、あ、一回、一回抜い...ッ！」

「やあだ」

「は、あああゝ...っ！ひ、あ、あっ、ま、って、やっ、ほ、ほんとに、イキそう、だから...！も、無理、これ、あ、っ、ッんんんうううう.....！！？」

自分の限界くらいは、自分が一番分かっていた。これ以上されたら我慢できないことくらい分かる。だから逃げたかったのに、しつこい愛撫に負けてしまった。ガクガクと腰から下が揺れる。それから、だらぁっと先走りよりは濃くて、精液より薄いような液体が僕の熱から滴った。とろりと一筋、線を描いてシートに落ちていく。

「うは、あああ...！は、はっ、...ッ！」

「イっちゃったな」

「っ、菅原さん、が、しつこい、からあ...！」

「そうだな。ごめんごめん、俺が悪いよ」

「んん...！」

きゅ、きゅ、とイッた後も菅原さんの指を締め付けてしまって、熱が簡単に引かない。だけど、本気で達した後ほどの脱力感もない。そしてイッてからはふわふわと心地いい、呼吸するだけでも快感を拾ってしまうまどろみの時間に入る。でも柔らかい責め方でイッてしまった気恥ずかしさは消えないから、どうしても菅

原さんに当たってしまう。それをさらりと受け止められると、余計に僕が我儘な気がして頬が熱くなった。

いつもなら、このくらいでイクお前が悪いって言うところなのに。俺が悪いなんて言わないくせに。言い返してくれないと調子が狂う。そう思って枕に顔を埋めたら、そっと後頭部を撫でられた。どこまでも甘い彼に、更に思考が鈍っていく。

ただし、菅原さんの根本的な部分に変わりはない。だから少し休憩したら、またゆっくりと指が動き出した。今も絶頂の余韻を引きずる僕は、ひっと喉を鳴らしてしまう。

「ちょ、っと...！？や、なんでっ」

「最近してなかったし、入念にしとかないと」

「最近って、んっ、先週も、した、のに」

「出張前だったから、平日一回もしてねぇもん。だからほら、ちゃんと腰上げて？」

「で、もっ」

「真壁」

「んんん...！」

本当は、このタイミングで中を刺激されるのは嫌だ。嫌だというか、ひどく感じるからもう少し時間を置いて欲しい。そう思うけれど、僕のためにしっかりほぐすのだと言われたら、強くは出れない。だから震える膝に力を入れて、体勢を整える。

「ちゃんと腰上げれて偉いな」

「や、そういうのいいから、早く」

「焦んなって」

「あ、っ、焦って、な、んっ、あ、あ、あああ...っ！はあ、はあっ、っひ、う、や、あ、あっ、ああうっ！」

「また腰前に行ってる。甘イキすんの嫌？」

「いあ、あ、あっ、だ、って、これ...！んっ、我慢、できなくてえ...！なっ、何回も、イッ、あ、あ、ううっ、ッ、っっ！！」

「俺、気持ちよくなってる真壁好きだから。恥ずかしがらないで全部見せて？」

「ッ、くうううう...！は、あ、や、イク、また、あ、あ...！あ、んんんんううっ！」

でも最初のうちは菅原さんがやりやすいように体勢を維持できても、イキそうになったら勝手に腰が逃げてしまう。へこ、へこ、と前に動いて、下に落ちていく。それでも一步も引かない菅原さんは、僕の腰が下に行こうと、左右に揺れようと、絶対に指を抜いてくれなかった。ぬちり、ぬちりと、じれったいくらいの速度で前立腺を前後に擦っては、たまに挟んで揉みこんで、恐ろしいくらいそっと撫でてきたりする。その全てをお利口に感じ取る弱点から、じんわりと全身に快感が広がっていく。ぶわっと時々破裂しては、僕の熱の先端からいやらしい液体を垂らして、髪の毛の先まで気持ちよさを染みこませてくる。

「はあああああ...ッッ！ああ、ん、うあ、ああああ...っ！」

「また甘イキ始まった？」

「ひ、あ、あ、い、今、イッ...！んん、ま、って、イッた、イッたからあっ！」

「そうだな。気持ちいいな。真壁のためなら、気持ちいいことなんでもしてやりたくなるよ」

「んああ...っ！？や、だめ、耳やだああ...！ひうっ、ううっ！？やあ、触らないで、前はだめ、イッた後だからあっ！！」

僕を快感の蜜に浸してくる菅原さんは、粘度の高い濃厚な絶頂を与えてくる。喉に張り付くみたいに甘い快感は身体に毒なのに、狂おしいほどイカされても苦しさが少ないから、もっと欲しいと思ってしまう。でも過度にイケばやっぱり逃げたくなる身体は、徐々にベッドに沈むだけじゃなく、別方向にも逃げだした。

耳を舐められるのが嫌で、まずは上半身がくねった。枕を抱えていた両手を耳に当てて、自分の弱い性感帯を防御する。けれど耳を責められなくなった菅原さんは、次に僕の熱に手を伸ばした。そこも触られたくなかった僕は、急いで身体を横向きにして、ぱっと片手を下に伸ばす。自分の下側になった耳は守らなくてもいいから、これで下半身も守れるはずだ。そう想着きつく足を閉じたのに、次は横向きに寝る僕の正面に寝転んだ菅原さんが、後頭部を押さえながら乳首を舐めてきた。

「うああっ！？や、だ、もういい、全部しなくていいからあっ！」

「だってここはまだ触ってなかったし」

「ひ、い、嫌、どこでもイっちゃうから、今はっ」

「優しく舐めるのもだめ？」

「っ...！」

正直に言えば、乳首なんか責めなくてもいい。さっさとお尻をほぐして、入れてくれたっていい。でも、絶対にやるなと言うほど菅原さんの行動を制限するのはどうかと思うから、少しならと許してしまう。珍しく下手に出る彼に、僕も寄り添わなければと思ってしまう。

「優しい、なら...！」

「分かった。なら、ちょっとだけ」

「うは...！あ、あ、あっ...！！！」

ただし1を許せば、的確に僕を良くするポイントを心得た彼の鋭い一撃が飛んでくる。舐め方ひとつは優しくても、快感は強い。そもそも甘イキのせいで感じやすくなっているせいもある。ちゅくりと淡く吸い付かれたくらいで、のけ反るほど感じる僕も悪いけれど。

「んああ、あゝ、あ、ま、って、乳首だめ、やっぱりだめっ...！」

「これされるの好きだもんな？」

「ふ、あ、ああゝあ、あう、ッ、ん、あ、あっ！？」

そして、ちゃっかり頭を撫でるふりをして、僕の耳をくすぐる指も登場した。なんなの、そういう不意打ちは意地悪なんじゃないのと頭を振ったら、今度はキスで頭の動きを封じてくる。

「ッ！？ふ、う、う、ん、んんっ！？っ、菅原さっ、あ、ん、んんんうっ！」

暴れる僕の頭を抱えながらのキスは簡単じゃないと思う。だから乳首や耳を責めるのは終わった。だけど彼の片手は、いまだに僕の下半身にある。ぬちぬちぬちと前立腺を擦られれば、きゅうう、とお腹の奥が切なくなって、ガクン、とある時膝が大きく揺れ動く。

「んん、や、ま、ってええ...！んっ、ふ、イク、から、またイクからあっ！」

「いっぱい甘イキして、真壁がやらしくなってくとこ見せて？」

「～～ッ、だ、め、いっぱいはやだ...っ！ああああだめだめっ！も、お、あゝ、ああああっ！！」

でも後ろの指から逃げようと暴れても、乳首を吸われて動きを制限される。ビンと反った背中をそっと撫でられたら、それだけでも頭が痺れた。

「はああ...ッ！だ、め、もお、だめ...！イッ、く、は、はっ、ああ、イクイク、うう、うううんっ！！」

後ろから責められるより、触れる部分を増やした今の方が、菅原さんの手数を増やしている。ただ自分を追い込むことになっただけじゃないかと、イクのが嫌な身体が暴れた。その皮膚を愛でるように撫でられては、背中をゾクゾクさせて、

頭の芯まで溶かされる。足のつま先をなぞられても、ビリッと快感の電気が下半身に走る。

「うはああ...ッ！」

「どこ触っても感じてるな」

「や、ほ、んとに、も、いい、もういいからっ！」

「今やっと3本指入ったところだから」

「じゃあもう、早くっ！」

「そうだな。頑張る」

「くう、ッ、あ、ああああっ！っひ、や、だ、そんなに揉まな、あ、あ、あ、っひ、だめ、だめだめ、っ、ううううんっっ！！」

必死に抵抗しているうちに、身体はいつの間にか仰向けになっていた。この格好なら僕は両手の自由がきくから、隠したい大事な場所を隠せる。だけどそれ以前に数えきれない甘イキで体力を奪われていたから、ただ両腕で顔を隠して泣きじゃくっているばかりになっていた。

だってどこかを隠したところで、また別の場所が標的にされる。それに、最も危うい場所には既に指がたどり着いていて、自分では隠すことができない。ならもう、菅原さんが止めるまでは抵抗なんて無意味じゃないかと、腕を濡らしながら思っていた。

「はふっ、う、も、終わってええ...っ！ん、んん、イ、くの、も、いいからあ...！」

「大丈夫だって。怖かったら俺にぎゅってしていいから」

「んんうっ！」

ただし、今日の菅原さんの良い点をひとつ上げるなら、底なしに優しいことだ。強い言葉は使ってこないし、いっぱい撫でてくれるし、僕を抱きしめてくれる。キスも多めだから、愛されている感覚は大量に流れ込んできて、精神的な充実感
は計り知れない。

キスが気持ちいい。こすれ合う皮膚同士の感触に脳が汚染される。ああもう、頭がバカになってきてる。この調子で甘イキが癖になったらどうしてくれるんだと思うのに、優しく揉みこまれる前立腺から絶えず快感は与えられる。

「あ、っ、ま、た、イク、止まんない、甘イキとまんない...っ！」

「とんとんってされんのも好きだもんな。我慢しないでイッていい」

「キス、キスして、もっとぎゅってして...！」

「いいよ」

「んんうっ！ふ、ふっ、ん、んっ...！ッんんんんううう！」

キスされている間は、菅原さんにしがみついてイッていた。彼が両腕で僕を包めないかわりに、僕が菅原さんに密着する。彼が甘やかす分、普段の数倍、僕も甘えたになっているのかもしれない。

ただ、これだけイッても、愛情を注いでもらっても、まだ何かが足りない。いやいや、結局求めるところはそこなのか。欲しがりも大概にした方がいい。こんな

んじゃ僕がただのビッチになってしまうとキスの最中に思っていたら、ぬぽんと指が引き抜かれた。

「ゴムもこの下のところだっけ？」

一瞬、菅原さんが何を聞いているのか分からなくて、返事が遅れた。それから彼の質問内容の意図するところと、僕が求めていることが合致していることに気が付いて、すぐに首を横に振る。

「い、いいから。今日付けなくていい」

「なんだよ。自分の家でするときは付けろっていうくせに」

「そっ、そういう気分なんです！だから、早く入れて...」

菅原さんがわざわざ僕にゴムの保管場所を聞いてきたのは、思いやりの一種だ。でも今は、ゴムを探したり、付けたりする待ち時間が惜しい。だったら正直に求めてしまえと、ベッドの下に伸びていきそうな彼の手首を掴んで止めた。

「分かった。じゃあローションだけ付けさせて」

僕のあけすけなお誘いに関して、菅原さんからの冷やかしが入らないのは心底嬉しい。でも今日はそういうセックスだから、バカにしてこないのはありがたかった。

ゴム無しの挿入だとしても、僕を傷つけないよう、僕の孔の入り口と、菅原さんの熱にローションが追加される。それから僕の足を開いて、菅原さんが切っ先を当てた。でも、なぜかすぐに入れてこないなと思って菅原さんを見上げると、彼はなんとも言えない顔で苦笑いしていたので首をかしげる。

「...真壁」

「何ですか」

「そんなに見られると俺も照れる」

「はぁ！？べっ、別に見てませんけど！」

「凝視、って感じだった」

「じゃあ何ですか、目でもつむってたらいいんですか！」

「いや、なんか待ちきれないって感じが露骨に出てる真壁っていいなと」

「～～っ、だったら焦らしてないで早くしてください...！」

「ごめんごめん、焦らしてたわけじゃない」

「っあ、ん、んんんうう...っ！」

入れない理由を彼に聞けば、逆に僕の顔が真っ赤に染まった。何それ、そっちだって僕の顔見てるじゃん、だったらさっさと入れたらと、可愛げのない気持ちと言葉が飛んでいく。そんな僕を見た菅原さんの表情や笑い方が何だかくすぐったくて、結局僕から顔を背けてしまった。

とはいっても、菅原さんは本当に僕を焦らすつもりではなかったようで、さほど時間をかけずに挿入してくれた。ゆっくりと入り込んでくる熱に、僕も呼吸を合わせる。深呼吸して、彼が入れやすいように奥へと招く。きついと思ったら少し

抜いて、それからまた入れてを繰り返せば、ほどなくして僕らの下半身の皮膚も密着するほど深くハマった。

「はぁ…。ひさびさの真壁…」

「そ、そこで実感しないで」

「ええ？俺だけの場所だし堪能したいだろ？」

「まぁ、そう、かもですけど…」

お互いに充足感のあるため息を付いたのが分かって、なんとなく気恥ずかしかった僕は、またつんけんしたことを言ってしまう。本当は自分だって久しぶりの菅原さんとの時間が嬉しいくせに、僕もそうだと素直に言えない。けれど彼には言わなくても伝わるのか、軽く笑った菅原さんは、シーツを握る僕の手を外して、指の間に手を入れてきた。されるがままに押された腕は、ぱたんと曲がって、僕の頭の横につく。場所が落ち着いたなら、今度は僕が菅原さんの手を握り返した。

「もう動いていい？」

「そんなの、僕にいちいち聞かなくても」

「大丈夫そうだけど、一応な」

「菅原さんがそんな感じだと、僕の調子も狂います…！」

「そう？俺は割と楽しいけど」

「んあうっ！？」

けれど、この甘いセックスそのものは嫌いじゃないのに、なんだか僕にいちいち聞かれるのはむず痒い。そもそも僕が嫌がっても菅原さんが好き放題するセックスが僕らの通常だから、動いていいか、なんて聞かれるとは思わなかった。良いに決まってる、というかすぐにでも動けるぐらいにほぐしたのは菅原さんでしょ、と言いたい。でもさっさと動いてと口にするのは恥ずかしくて言い淀んでいたら、ぐりっと中の前立腺が押された。その瞬間、動いても良いと思っていた心が逆の方に傾く。

まずい。さっき入念にほぐされたから、前立腺がかなり感じやすくなっている。動かれるのはともかくとして、そこを狙われるのはマズいかもと、慌てて待ったをかけようとした。けれどそれよりも早く、菅原さんの腰が動き始めてしまう。しかもこれが、あえていい場所を狙った小刻みな動きだったから、僕は二の句が告げられないくらい思い切り感じてしまった。

「ひ、あ、あ、あ、っ、ん、んんっ、あう、う、やっ、あ、あああ！？」

「すごい締め付け…。すぐにでもイキそうだな」

「は、ッくううう…っ！！？」

感じすぎなのは僕も思っていた。だけど、手を握られているからあまり身じろぎもできない。この格好だと、圧倒的に菅原さんが優位だった。こんなに軽い挿入でイッていたら後がキツいのにとどうしたらいいんだと、自然と腰が浮く。刺激から逃げようと、シーツに付いた足がベッドを蹴った。

でも、その抵抗も長くは続けられない。なぜなら、身体を僕の方に傾けてきた菅原さんが、ねとりと僕の耳を舐めてきたから。嘘でしょ、今そこを責めてくると

か信じられないと、隠すために彼の手を振りほどこうとした。だけれど握力で勝てない僕は、ぎゅっと力を入れて握られたら、菅原さんの手から逃げる事ができない。それはつまり、責められる部分を隠す手段がないのを意味している。

「うあっ！ああ、ま、待って、だめ、舐めるのだめえっ！！」

「すごい逃げたがってる。相変わらず耳弱いな？」

「んああ、あ、や、だ、あ、イクからっ！すぐ、イッ...！」

「逃がさないからイッていいよ？」

「〜〜〜ッ！！っあゝ、あ、あああああっっ！！」

全ての場所に与えられる刺激も、責められ方も、比較的ソフトだったと思う。別に思い切り突かれてもいないし、挿入も浅めだったし、追加で舐められたのも耳だけ。なのにあっさりイッてしまった。しかも、大きく下半身を揺らして。こんな優しい責め方で、全身を使って絶頂するなんて。恥ずかしい。死ぬほど恥ずかしい。なのに、顔も隠せなかった。痛いぐらいに見つめられているのが分かって、頬も耳も火が出そうなくらい熱い。

「や...っ！見ない、でえ...！」

「無茶言うな。見るに決まってる」

「ひうっ！？う、あ、だめ、ま、まださっきのがっ、お、わって、な、あ、あ、あっ、んんっ！」

「悪いな、俺も我慢に限度ある...！」

「んんんうっ！！」

だけど優しい菅原さんは、あくまで彼の努力によって作られたものだ。だから理性が切れそうなのか、バチンと強い挿入が一度行われて、それから一気に僕側もスイッチが入ってしまった。イキやすくなった後は、軽く動かされても、強めに腰を打ち込まれてもイッてしまって、歯止めが効かなくなる。でも僕を無理にイカせようという思惑でそうになっているわけじゃなくて、菅原さん自身にも手加減する余裕がないことは、手を握る強さからも伝わってきた。

「っ、はぁ、真壁、真壁...！」

ぎゅう、と握られる手を、僕もぐっと握り返す。いつも散タイカされて前後不覚になっていることが多いから、こういう余裕のない菅原さんを見れるのはかなり貴重だ。僕の名前を呼びながら、顎から汗を滴らせる菅原さんがかっこよくて、思わずきゅんとしてしまう。

でも、そんな彼をずっと見ていたい気もするけれど、せっかくだからもっと身体を密着させたい。手だけではなくて、全身で彼を感じたくて、僕は続く絶頂の中で菅原さんと呼んだ。

「はぁ、あ、あっ、ッ、すがわ、ら、さん、すがわら、さ...っ！」

「何...？」

「ぎゅ、って、したい...！」

さっきからイってばかりだから、目からは涙が零れているし、汗だくで髪もぐしゃぐしゃだろう。そんなみっともない顔をした僕が、乙女チックなお願いをしたのを見て、菅原さんは随分優しい顔で微笑んだ。それからそっと両手を握っていた手を外して、僕の肩を背中の方からそっと抱えてくれた。それに合わせて僕が彼の背中に腕を回すと、ぴたりと上半身の肌が触れあう。

「これでいい？」

「や、だ、キスもしてっ」

「はいはい」

「んっ、んう、っ、ん、ん、んんんっ！」

くっつけられるところは全て擦り合わせて、僕は菅原さんと交わった。ゆっくり動かれても感じるし、頭を撫でられたらとろけるほど幸せで、このまま身を寄せていつまでも傍にいたいと思ってしまう。一生この時間が続けばいいのになと思えるくらい至高だった。

「はあ、あ、きも、ち、い、菅原さん、あ、ひ、せんぱっ、あ、うう、イク、イク、あ、あっ、ッ、すご、い、も、あ、ああああ...！！」

「すごいな今日の真壁。お前、そんなにかわいくなるなんて聞いてないぞ」

「んんう、っ、あ、んむ、っ、好、き、菅原、さ、あ、あ、っ、ぎゅ、って、してえ...！」

「ああくそっ、マジでもう...！ヤバいって、俺の理性を殺す気か」

「んああああっ！」

ぐうっと奥まで押し込まれる菅原さんの昂りが熱くて、僕で興奮してくれているのが嬉しくて、ただ必死にしがみついていた。離れないし離さない。僕のため。誰が欲しいって言ってもあげないからと、彼をどこまでも独占したい気持ちになる。それからむりと彼の唇に吸い付いたら、思いのほか熱烈にキスを返されてびっくりした。どうやら菅原さんにも、本当に余裕がないらしい。ガツガツと腰を動かすのを見るに、どうやら菅原さんもイキそうな感じらしい。だから、うっかり外に出すなんて許さないぞと、僕は彼の腰に足を絡めた。彼の後ろで交差させて、中出しを強制する。

「は、う、う、な、中にっ...！っん、全部、出して...っ！」

「っ、煽んなバカ...！く、う、出る、俺も出る...！」

「んんっ、あ、あ、ううううっ！」

ぎゅうぎゅうに抱きしめながら中出しを求めたら、菅原さんの熱がぐっと膨張した。ああ、これはまもなくだなと思ったから、今度は中にも力を入れて締め付ける。すると予想通り、彼はすぐに達して、僕の中に熱い液体を放っていた。

「はあ...！や、ばいってお前...」

「ん、っ...？ちゅー、は...？」

「はいはいもう...。かわいいなもう...」

「んんっ」

ふう、とイッた後に肩で息をする菅原さんの背を撫でていても満足はするけれど、今日の菅原さんは僕を茶化してこないから、素直にしたいことも言ってみた。すると彼は、汗ばむ額を軽くぬぐって、ちょっと困った顔をしてはにかんてから、僕を抱きしめてキスをしてくれる。そのままゆっくり精液を塗り込めるみたいに腰を動かされるのも気持ちよくて、愛の多さに溺れそうになった。

これほど良くしてもらえるなら、正直どうかと思っていたけれど、よしよしセックスなるものは悪くない。僕の身体のしんどさレベルも軽度だし、今後毎回これでいいんじゃないかとすら思った。

「ねえ菅原さん、もう一回...」

「このまま続ける？」

「うん」

でも僕は、何もかもを溶かされて忘れていた。僕を甘やかしてドロドロにしているこの目の前の人は、いつも僕を泣くほどイカせて失神するまで追い込む人と全く同じで、中身は変わっていないことを。

だから中出しされたまま抜かずに2回戦を行ったときに、既に彼の策略にハマっていたなんて、全く気付かないまま行為を続行してしまった。

「はあ、あ、イッ、く、イク、また...！あっ、ん、ん——.....ッ！」

「...だめ。まだイクな」

「んんううう！？」

中を刺激されて射精しそうな感覚に、僕はぐっと腰を浮かせた。なのに出ていくはずのものが、根元を握られてせき止められる。ある意味いつもの感覚なのに、今日は素直に出せるものだと思っていたから、その衝撃は大きかった。だから、なぜ止められたんだと菅原さんを見上げた時に、にいと意地悪に笑う顔を見て、色々思い出してハッとする。

「なっ、なんで...！？今、イケそう、で」

「何でもなにも、お前だって物足りないだろ？俺からいじめられないと」

「はあ！？そんなことはっ、あ、つく、いや、だ、そこ、あ、あああああ...ッ！」

いっそ、前を握られて射精を制限されるだけならまだいい。でも意地悪モードに入った菅原さんは、その状態のまま腰を動かしてきた。しかもいい場所をしつこく擦ってくるという、悪意に満ちた腰使いで。

信じられない、甘いセックスの予定じゃなかったのかと、僕の根元を握る指を引きはがそうと躍起になる。

「くう、う、あ、や、だ、やだっ！離して、イキたい、イキたいから！」

「中の吸い付き激しくなってんのに？ホントに嫌って思ってるの？」

「ふっ、う、そ、んな、こと...っ！」

「嘘つけよ。こうやって俺にいじめられんの好きなくせに」

「んああああゝ あ.....ッッ！！？」

でも、そんな手は邪魔だと言わんばかりにもう一つ伸びてきた手が、僕の手を避けながら亀頭を撫でる。ぬりぬりと指一本で、余裕たっぷりに先端を撫でてくるのがたまらなくて、ビクンとお腹が浮いた。そのまま2本に増えた指が、カリカリと先っぽを触れるか触れないかの距離で引っかくと、きゅんとお腹の下の方が切なくなる。

「ふあああっ...！あ、あう、ッ、や、それ、っん、んんうっ！」

一緒に前立腺をコリコリと押されると、下半身全部がゾクゾクする。反射で膝が浮いては、つま先が突っ張って、シーツを蹴った。それでも熱が収まらなくて、腰からお腹、背中へと興奮が伝染していく。

そんなにしないでと、僕の手は菅原さんのいやらしい手を必死に握っていた。それでもお構いなしに熱を愛でられる。緩く扱かれたり、亀頭を包み込んで撫でまわされる度に、どんどん余裕はなくなっていく。

「ひんっ、んっ、も、やだああっ！イキたい、出したい、もぉ、もぉイクっ...！」

「ヤダヤダ言うけど、そうやっていじめられてる時の方が可愛い顔してるぞ、お前」

「そんなの菅原さんがいじめたいだけじゃないですか！」

「それもある。まあ、いじめてもいじめなくても、どちらも可愛い事には変わらないんだけど」

「んやっ、だ、め、それ、それやだってさっきも言っ、ッあ、あああああ！！」

つい、つい、と先端の割れ目をなぞられてから、先走りの出てくる部分を親指で押し広げるように擦られると、一気に射精したい気持ちが強くなる。出したいのに。本当は今すぐにでも出せるのに。どうして出すことができないんだと、全身が悶えてひっくり返りそうになる。それでもしつこい寸止めは続くし、中の菅原さんは動くしで、段々僕も理性が削られていく。

「んあゝッ、あ、も、や、あっ、イキ、た、い、イキたいいいゝっ！出した、い、ですっ、も、許してえっ！！」

「いいなあ、やっぱ真壁はこうじゃないとなあ？ほら、イキただろ？本気イキしたいなら、もっと真剣にお願いしないとイカせてやんねえよ？ちょっとだけ緩めてじわじわイカされてえの？」

「ふぎ、ッ、あ、あ、っっ！！！？」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー